民話

文化　地域

**・・・民話で世界旅行・・・**

**ねらい　：**同じモチーフのはなしをくらべ読みしてみることで、さまざまな地域の民話を味わう。

**対象　　　　：**小学校中学年以上

**所要時間　：**３０分～

**準備　　　　：**３つの民話を数分印刷しておく。

**進め方　 　：**

1. ３人のグループをつくる。
2. １人１つの民話を印刷した紙を配る。（３人は別の民話をもつことになる。）
3. それぞれの民話を読み、味わう。
4. １人ずつ自分の配られた民話を２人に向けて語る。
5. 読んでみた感想、聴いてみた感想、３つの民話について、月のイメージなどを語り合う。

（発展）

①月をモチーフとした民話を他にも探してみる。

②自分の興味あるモチーフについてどのような民話があるのか調べてみる。他の人と共有する。

③自分の興味ある地域、行ってみたい地域にはどんな民話があるのか調べてみる。他の人と共有する。

④身近な人で民話を知っていそうな人をたずねてみる。なぜ知っているのか、誰からきいたのか、どんな思い出があるのかなど、たずねてみる。もし、身近な人で見つからなければ、民話を知っていそうな人を紹介してもらう。

**留意点　　：** （発展）③必ずしもすらすらと語れる人でなくともよい。この教材と同じモチーフでなくともよい。

**【参考文献】**

日本民話の会/外国民話研究会編訳（１９９７）『世界の太陽と月と星の民話』三弥井書房。

日本民話の会/外国民話研究会編訳（２０１３）『新装改訂版　世界の太陽と月と星の民話』三弥井書房。

**コラム　《月の中には何がいるか―アンケート》**

**日本（沖縄）沖縄本島**　兎　　　　　　　　　　　　　　**沖縄本島**　赤い顔をした男

**八重山**　アールバンという大男　不老不死の薬を取りに月に行って、そのまま月にいる

**八重山石垣島**　金持ちの欲張り男が木の枝にぶら下がっている様子

**宮古島**　水桶を二つ担ぐ男　人間に生き水を蛇に死に水を渡すよういわれたのに失敗して罰として月にいる　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　**渡名喜村**　兎

**宮古島**　片足をもぎ取られた男の人　　　　　　　　 **多良間島**　若水を担いだ天使の絵

**韓国**　兎　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　**韓国**　兎が餅つき

**香港**　兎が餅つき　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 **香港**　王兎。薬草を搗く兎

**台湾**　月の女神

**台湾**　兎　身をやつした神にささげる食べ物を用意できずに自ら火に飛び込んだ兎で、月の女神嫦娥（じょうが）につかえて薬作りを手伝っている。

**台湾**　仙人になりたいと月で桂の木を切る呉剛という元きこり

**ツバル（南太平洋にある英連邦王国の島国）**　岩の上に座る女性

**オーストラリア**　男。月を点けたり消したりが仕事

**インドネシア**　女の子と猫　　**インドネシア**　女の人が編み物している　　**インドネシア**兎

**ミャンマー**　月の中に兎が座っていて、その側でおじいさんが米を杵でついている

**ミャンマー**　米をつく爺さんと臼のそばに座る兎

**ベトナム**　兎。十二支を猫に譲り、月で嫦娥の手伝いをする。

**ベトナム**　嘘つきの若者がガジュマルの木の下にいる（教科書にのっている話）

**タイ（バンコク・チェンマイ）**　兎　 **タイ（東北部）**　人が兎に餅をあげている（諺にもある）

**ブータン**　月のおじいさんと女の子（天道さん金の綱型）　モンゴル　犬がいて吠えている

**インド**　兎　　　**インド**　機を織るおばあさん　　**マダガスカル**　歌って踊る人たち　　　　**ケニア**象

**ハンガリー**　人の横顔に見える　　　　　 **オーストリア（ケルントナー州）**　男

**デンマーク**　月の男　　　　　　　　　　　　 **イタリア**　こんな考えは異教徒として見られる

**スペイン（アンダルシア）**　チーズ　　　　 **スペイン**　お爺さん

**イギリス**　男　　　　　　　　　　　　　　　　 **イギリス**　兎の顔に見える

**イギリス**　チーズに見える　　　　　　　　　 **カナダ**　男が住んでいる

**アメリカ**　男（男の顔）に見える　　　　　　 **アメリカ**　男の人の顔、チーズ

**アメリカ**　男の顔、チーズ（クレーター）　　**アメリカ（フロリダ）**　兎、ヤギに餌をやる女

日本での「月の兎」のように誰でも知っている国や地域は限られている。「知らない」という回答があった方々の国は、ベトナム、イラン、トルコ、ヨルダン、アフガニスタン、エジプト、ウガンダ、ルーマニア、スロヴァキア、ポーランド、フィンランド、イタリア、オーストリア、スペイン、ポルトガル、イギリス、アイルランド、アルゼンチンなど。

配布資料①

**《月の中の羊飼い》**

**ルーマニア**

ルーマニア人の羊飼いが、禁じられている牧草地にいつも羊の群れを連れていっていた。羊たちは、牛や馬のための草を全部食いつくしてしまった。役人がこの男を捕まえようとしたが、どうしても捕まらなかった。日曜になると、羊飼いのおかみさんはいつも、

「今月だけは悪いことはしないでおくれ、いつかきっと取り返しのつかないような目にあうだろうから」と言って頼んだ。

「おれを捕まえるやつはまだ生まれちゃいないさ」

と男は答えた。しかし、おかみさんはため息をついて言った。

　「お役人には捕まらなくても、神さまはごまかせやしないよ」

　ある日曜日、羊飼いはまたもや羊を川の側の禁じられている牧草地へ連れていった。ちょうど空から川に虹がかかっていた。羊はとにかく好奇心が強いので、水を飲みに川へきた時、虹の上に登っていってしまった。後から急いでやってきた羊飼いが、呼んだり口笛を吹いたりしたが、羊たちは引き返そうとはしなかった。虹が消えた時、羊飼いは羊と番犬と一緒に地面から切り離されてしまった。

　男はこれまでさんざん悪いことをやってきた罰として、空で羊の番をしなくてはならなくなった。人間の目ではよくわからないが、空の雲は実は羊だったんだ。羊飼いのおかみさんも後ろから虹を渡って夫のところにやってきた。羊飼いが地上に降りられるのは、虹がかかって、羊が川へ水を飲みにいく時だけだった。空にも水はたくさんあるけれども、なにしろ高いところなので、水は空に留まってないで、すぐに下に落ちてしまうんだ。

　羊飼いは月に、羊たちは星に住むことになった。満月のときに見える月の中の暗い影は、羊飼いが竿にかけている洗濯物なんだ。羊飼いのおかみさんは羊の乳でバターをたくさん作っている。あるときバターを売りに行こうとして太陽の側を通った。そのとき太陽をじっと見つめたので、目の前が真っ暗になって倒れてしまい、バターこぼしてしまった。そのバターのせいで、空はつるつる滑るようになった。太陽が夕方こっちに来たとき、つるっと滑ってあっというまに沈んでしまうのは、こういうわけなんだ。

配布資料②

**《月の兎》**

**ユカギル（ロシア）**

昔々、中の国（注）にどんなことでもやってのける器用なおじいさんがいて、人間であれ、獣であれ、助けを求めてきた者には手を貸した。たいへんに腕がよく、獣の爪やひづめを取り替えてやったり、人間の歯を治したりした。

　あるとき、一匹の兎がオオヤマネコの娘と結婚しようと考えた。これまでオオヤマネコと兎は仲が悪かったので、兎たちはこれでいさかいがなくなると喜んだ。

　花婿になる兎はオオヤマネコの一族全員に贈り物をしようと考え、おじいさんに手伝いを頼んだ。おじいさんはすぐに仕事に取りかかった。女たちには鍋を、男たちにはナイフ、なぎなた、金棒、槍など、ありとあらゆるものを作ってやった。ところが兎は自分の花嫁に贈る指輪のサイズを知らなかったので、おじいさんに手伝ってもらって、いろいろな大きさの婚約指輪を作っては花嫁に届けた。ところがどれも花嫁の指に合わなかった。

　オオヤマネコの娘は花婿から届く指輪を獣たちに分け与えた。トナカイにもヘラジカにもネズミにもやった。だから獣たちは体のどこかに白い指輪をつけている。脚につけているもの、額につけているもの、いろいろだ。おじいさんと兎は湖の岸辺で指輪を作り続けたが、花嫁の指にぴったりの指輪はできなかった。

　そんなある晩のこと、兎たちは花嫁になるはずのオオヤマネコの娘がクズリ[イタチ科の動物]の若者と結婚するという知らせを聞きつけ、みんなしてシャマンの術をはじめた。おじいさんと兎が中の国から月へ着くまで、みんなで術をした。月におじいさんと兎の影が見えるのはそういうわけなのさ。いまだにオオヤマネコと兎は仲が悪く、オオヤマネコは兎を捕る。

　注：世界は三層より成るとされ、人間は中の国に住んでいる。

配布資料③

**《月とその蛙女房》**

**ミクマック（カナダ）**

グルースキャップ（注）がこの地を支配していた最初のころ、現在は月であるものが日中輝き、現在、太陽であるものが夜輝いていた。月は赤くてギラギラしていたし、太陽は青白くて銀色だった。その仕事も今と正反対だった。

　当時、月は、つまり現在の太陽のことだが、いつも自分の仕事をきちんとやっていた。いっぽう、太陽は、つまり現在の月のことだが、仕事が大変いいかげんで、だらしがなかった。ふだんは、たいへん遅く起きてきて、早々と寝ていたし、ときどきは、とんでもなく朝早く起きたとおもったら、夜更けになってもまだ寝なかったりという具合だった。冬の間、何週間も顔をださないということもあった。

　ある時とうとう人々は太陽の気まぐれにうんざりして、グルースキャップになんとかしてくれと訴えた。グルースキャップは太陽を叱りつけたが、太陽は、

「わたしはできるかぎりのことはやっているし、わたしを非難している人たちは、ただ単に自分に敵意を抱いているだけなのだ」と答えた。

　グルースキャップは、太陽はたくさんの女房をもっていたが、その全員に満足しているわけではなかった。中でも、蛙にはほとほとうんざりしていた。裁判が開かれるとわかったとき、この蛙女房は、自分も行きたいと言ったが、太陽は、女の来るところではない、と禁じた。

　裁判が始まってしばらくたったころ、蛙女房が法廷に入ってきた。それに気がついたグルースキャップは、蛙のために席をつくってやろうとしたが、蛙女房を見た太陽はたいへん怒って言った。

「そんな者のために席をつくってやる必要はありませんよ。わたしのまぶたにのっていればよい」

　そして、また裁判が続けられた。太陽は自分で自分の弁護をしたが、たいそう賢かったので、そこにいた人々はすべて、グルースキャップまでもがまるめこまれてしまい、結局、太陽は無罪になった。

　裁判が終わり、太陽はもとの仕事に戻ろうとした。しかし、まぶたに張りついた蛙女房が、そんなことをしても離れなかった。自分が常にここにいて、太陽がきちんと仕事をするように見張るというのだ。ほかの人々もなんとかはがそうとしてひっぱってみたがだめだった。そこで、人々はグルースキャップに訴えた。

「蛙女房がぶらさがっているせいで、太陽は光も損ねるだろうし、第一、ひどくみっともなくなった。これではわれわれは世界中の笑い者になってしまう」

　そこで、グルースキャップが名案をだした。

「月と太陽を取り替えればいいのだ。仕事が完ぺきでわれわれに迷惑をかけない月が、夜のかわりに昼の明かりになり、名前も太陽とかえればよい。そして、太陽が月になって、昼の明かりのかわりに夜の明かりになればよい。夜ならば、顔の一部に蛙が張りついていても、あまり目立たないだろう」

というわけで、昔太陽だった月は、最初は蛙が張りついている方を見せないように仕事に出てくる。そのうち、顔を全部地上にまともに向けたときに、右のまぶたに蛙が張りついているのが見えるはずだ。

　ひと月の仕事が終わるころ、月は、いつもきまって、蛙女房を振り落とそうと、狂ったように突然顔の向きを変える。しかし、うまくいったためしはない。

　蛙は今でもそこにぶらさがっている。蛙女房の好奇心のせいで、元太陽だった月は二度と昼間に輝くことはないだろう。

　注　カナダ北東部森林地帯に住むミクマックで語られる文化英雄。